神田神保町と喫茶店

── 書籍・出版産業従事者と喫茶店の関係 ──

大　内　田鶴子*

キーワード：書籍・出版産業，喫茶店，コミュニティ，神田神保町

はじめに── 知的創造のための対話空間 ──

モンテスキューは『ペルシャ人の手紙』（1721年）で，「パリでは人々は盛んにコーヒーを飲み…，そこ（カフェ）から出てくる人は，入ってきた時より4倍も精神が鋭くなったと思わぬものはいない」［渡辺，37頁］［岩波文庫102頁］と述べている。このように，ヨーロッパでは17世紀から18世紀にかけて啓蒙主義の社会潮流の中でコーヒーが大流行した。知的な活動の増大，一般の人々が知識の世界に入ること，「酔ってストレス解消」ではなく，「醒めて，雑談，商談，議論，激論」の日常生活が始まったことと無関係ではないと思われるのである。もっと言えば，カフェは新しいコミュニケーションの場として，近代科学や文化の創造に一役かっていた。イギリスのコーヒーハウスにおいて新聞・雑誌が生まれたことからも，ヨーロッパではコーヒーと活字文化が関係を持って人々に受入れられてきたと想像できる。

ところで，コーヒーや茶は嗜好飲料で，カフェインの覚醒作用を期待して飲まれる飲料である。カフェとはcoffeeのことであるが，同時にコーヒーを飲ませる店のことでもある。日本にはコーヒーを飲ませる「喫茶店」があるが，喫茶とは茶を飲むことで，言葉の由来からすると，コーヒーを飲むことではない。日本における喫茶の習慣は，中国から寺院に伝えられ，日本独自の茶道の伝統芸能を確立したが，もとは「薬」として知識階級である僧侶にたしなまれたものである。

最近の日本でカフェというと，外来のチェーン店が多いが，それより前からあった「喫茶店」「純喫茶」などは減少しつつある。今日の東京では浅草，銀座，神保町などにまだこの古いタイプが生き残って健闘している。主としてコーヒーにこだわり，飲ませる店であるにもかかわらずこれらはサテン（茶店）といった。日本にコーヒーが伝わったのは，江戸時代のオランダ商館が初めで，江戸時代末には幕府高官の日常生活などにも入り込んでいたようだ[1]。その後文明開化によって，一般庶民向けのミルクホールやコーヒーハウスが出店されるようになるが，戦後の高度成長期までは都市人の舶来好みの範囲内であったろう。一般庶民が喫茶店でコーヒーを飲む習慣は1960年代後半から1980年代にかけて始まったとみられる。

日本ではインスタントではない，店主が「こだわって抽出」したコーヒーを飲ませる純喫茶が流行した。筆者の思い出では，純喫茶あるいは喫茶店は大学の帰りにかならず寄り道して，雑談や議論をする場所であった。大学闘争を戦った当時の大学生の生活は，社会科学や哲学，思想，恋愛そして特に反権威・反体制と反戦・平和の理屈や議論に満ちていた。日本において，コーヒーを飲ん

2009年11月30日受付
* 江戸川大学　ライフデザイン学科教授　都市社会学，コミュニティ論

でカフェから出てくる時に「精神が4倍も鋭くなった」と思われる時代はこの頃かもしれない。このように日本では，カフェが近代文化の創造の場であったと一概に言えないが，近代以降の知的活動の拠点の一つである神田神保町に喫茶店が多いことは注目に値する。

本稿では，以前の稿で活字と印刷物の発展の歴史を見てきた中で，実は印刷物を生み出す人々の生活の中に，本になる以前の直接対話の世界にも様式の変化（議論の出現）が感じられたことから，もうひとつのメディア=コミュニケーションの空間として，日常生活の中で対話が行われる場所に着目することとなった。日本においては，オープンエアのカフェのテーブルに飛び乗って革命の演説が行われたり，コーヒーハウスで取材された情報が雑誌に編集されるような史実はなかったが，神田神保町が本屋街として注目されるとき，喫茶店の紹介が伴うことが多い。本稿では，本屋街と喫茶店の関係について，少し立ち入って調べてみようと試みた。

本稿の目的は神田神保町の喫茶店の重要性を検証することである。活字情報産業従事者の喫茶店利用頻度が高いこと，神保町が創造的なゾーンであること，神保町が創造的なゾーンであることと喫茶店が多いことと関係しているという事実を明らかにすることである。

1　神田神保町と喫茶店

事実として，神田神保町には喫茶店が多い。神保町一丁目の靖国通り南側に多く立地し，特に，古書店街の裏側の路地に，「由緒ある」喫茶店が生き残っている。神田神保町のタウンサイト「ナビブラ」では，2009年11月現在，神田神保町周辺の範囲で29軒の喫茶店を紹介している。著者らの2007年の調査[2]では，神田神保町一丁目と二丁目だけで40軒以上立地していた。前に述べたように，ヨーロッパでは活字情報の普及拡大とカフェやコーヒーハウスの隆盛とは同じ時期に起こっている。このため，神田神保町に喫茶店が多いのは，活字情報産業に携わる人々が多いことによるという仮説が考えられた。書店・出版関係者がどのように喫茶店を利用しているのであろうか，喫茶店の利用者に活字（加えて今日ではデジタル）情報産業の従事者が本当に多いのだろうか。このような問題意識でアンケート調査を計画した。

2007年（平成19年）にアンケート調査の準備として，喫茶店主にヒアリングを行った。調査の実施概要は以下の通りである。

調査期間：2007年6月～9月
調査店舗：カフェテラス古瀬戸コーヒー店，カフェ・ティシャニー，フォリオ，ラドリオ
調 査 者：江戸川大学，大内田鶴子・土屋薫
参加学生：木村勇太，井上亮介，川島奨平，領家悠介，大本洋介，竹野拓也

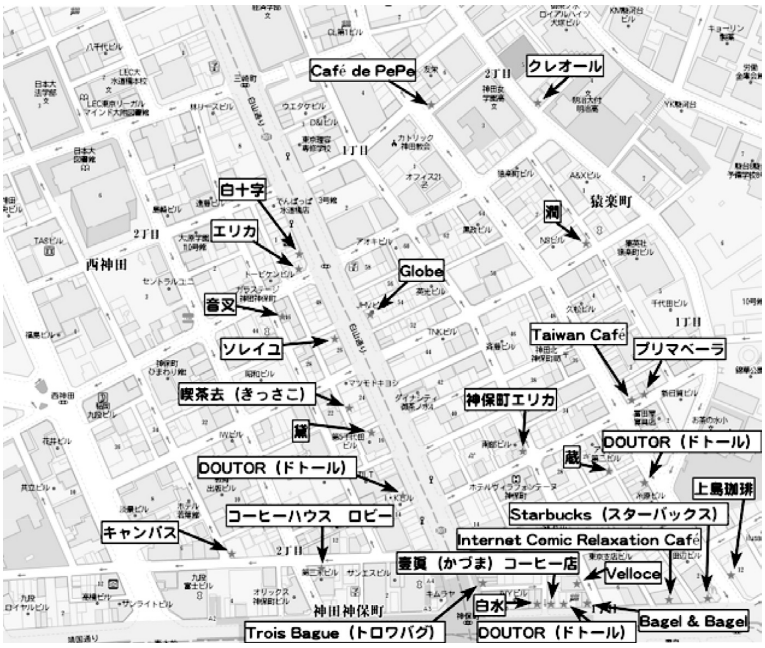
ヒアリングの結果，各店の特徴は下表のように整理できた。

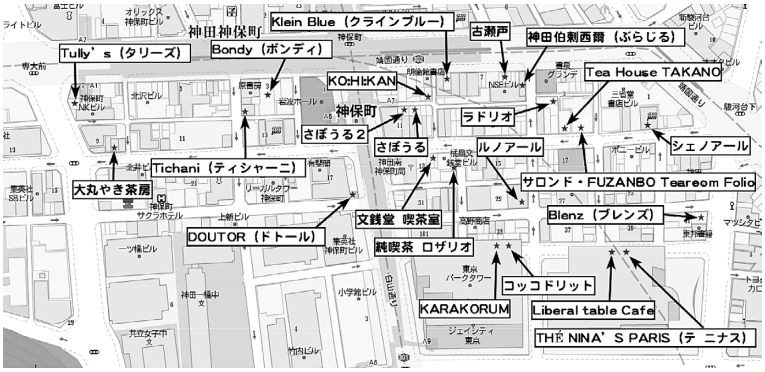
店名	A	B	C	D
立地	神保町一丁目	神保町二丁目	神保町一丁目	神保町一丁目
店の特徴	裏路地に店入り口	裏道の二階	裏道の地下	裏路地に店入り口
開業歴	19年目	16年目	約20年	50年以上
価格	高	高	中	中
利用客の特徴	作家，芸能関係者 オーナーの関係者	出版関係者	ビルオーナー関係者 書店関係者 一般来街者	作家，出版関係者 書店関係者
店舗所有	○	○	△	○

ヒアリング調査に応じてくれたこれらの店舗は，その後のアンケートによる利用者調査からも，出版・書店関係者の利用が多いことが検証された。ヒアリングから得られた知見としては，

- 喫茶店はチェーン経営の形態と，オーナー経営とでは，利用のされ方が異なる。チェーン

神田神保町 1，2 丁目の喫茶店の位置（2007 年調査）





（土屋薫作成）

経営の場合は，顧客の回転を重視しているので，顧客は一寸休憩に立ち寄るような利用の仕方が主である。オーナー経営の場合は，じっくり腰を落ちつけられるような利用のされ方を目指している。コーヒーの値段も概して高めである。

- コーヒー一杯の値段が比較的高い店のお客はそれに見合うスペースの使用をしていること。出版社の打ち合わせ，書店の打ち合わせ，プロダクションの打ち合わせ，対談の録音，対談の撮影，サロン活動，イベントなどである。利用者のオフィスビル以外の仕事スペースとして使われるため，外部者から見られないような奥まった店構えの店舗が好まれ，生き残っているという意見。
- ドトール，スターバックスなどのチェーン店の進出はヒアリング対象の喫茶店の経営にあまり影響を与えないという発言。
- 博報堂・住友商事がこの地にいた頃は，その職員の利用が多かったが，現在は集英社・小学館関係，書店関係，新聞社の職員などの人たちが利用者として認識されている。仕事で

の利用は領収書を切るため明確に認識されているのである。三井のツインビルが出来てからは，若干顧客が増加したという意見もあった。

- これら調査対象4店舗については学生の利用は殆どなく，この付近を職場としている中高年層や付近で働いていたOBなどが利用するという。これらのうちランチサービスを行っている店では，ランチ時間帯は客層が異なり，付近で働くOLなどが多いという。
- 大学のそばに立地している店では，1980年代には高いコーヒー代にもかかわらず学生が顧客の大半であったが，最近では主なお客は教授達であるそうだ。

2 創造的コミュニティとしての神田神保町と「創造的職業階層」

リチャード・フロリダは，ある種の職業の人々の構成割合の多い地域社会を創造的コミュニティとして捉えた（Richard Florida, *The Rise of the Creative Class,* 2002）。フロリダの創造的コミュニティの説明では，アメリカ社会らしく，人口流動性と多民族性を前提とした，「オープンで制限の無いネイバーフッド」が創造的コミュニティであるとする。神保町の分析にこれを活用するのは限界があるとはいえ，その地で働いている人々の種類から地域の創造性の程度を測定する試みは魅力的である。彼は都市の創造性を，働いている個々人の職業の種類という属性によって測定した。彼の分析方法の一部を紹介すると，用いた指標Talent Index（能力指標）は大卒者の割合で，Tolerance Index（寛容性指標）はゲイの割合や「ボヘミアン」の人口に占める割合で測定している。「ボヘミアン」とは，作家・芸術家・ディレクター・カメラマンなどの職業者である（Florida, 333）。本稿で特に必要な情報は，フロリダの用いた職業分類である。フロリダによると，クリエイティブクラス（創造的職業階層）は次のような職業である[3]。

Creative Class 創造的職業階層は，「超創造的コア」と「創造的専門家」からなる。

〈Super-Creative Core〉超創造的コアとは次のような職業である。

Computer and mathematical occupations　コンピュータ関係，数学・統計学関係の職業

Architecture and engineering occupations　設計やプランニングの職業，様々な分野の技術者

Life, physical, and social science occupations　生命・自然科学，社会科学関係の研究・教育的職業

Education, training, and library occupations　教育・訓練・図書館関係の職業

Arts, design, entertainment, sports, and media occupations　芸術・デザイン・エンターテイメント・スポーツ・メディア関係の職業

〈Creative Professionals〉創造的専門家とは次のような職業である。

Management occupations　経営管理の職業

Business and financial operations occupations　企業経営や財務に関する専門的職業

Legal occupations　法律に関する職業

Healthcare practitioners and technical occupations　介護士や療法士などの職業

High-end sales and sales management　高級高額商品販売やセールス管理の職業

神田神保町にはフロリダの述べる，超創造的コアや創造的専門家に含まれる職業の人々がきわめて多いと思われる[4]［脇村，226］。このため，国際標準職業分類［日本労働研究機構］上でフロリダの定義に対応すると思われる職業をできるだけ詳しく回答してもらえるように，アンケート票に職業の細分類を設けた。また，書店や出版関係の仕事に就く人々にアプローチするために，書店や出版社の関係する団体[5]に依頼して，アンケート票に回答していただいた。その結果，フロリダのクリエイティブクラスに対応する職業の回答者は概ね104人，全体の42.3%であった。アメリカの職業分類にも日本の分類にも「古書籍商」という項目はない。また古書店経営者である当事者達は

殆どが自らを自営業と認識している。ここでは，古書籍商業協同組合神田支部組合員はすべてフロリダの言うクリエイティブクラスに含めることとした。また職業細分類の回答者 77 人の内訳は，記者・編集者 10 人，デザイナー 8 人，情報処理技術者 5 人，研究者・大学教員 4 人，経営コンサルタント 4 人，図書館司書 3 人，大学以外の教員，著述家，社会福祉事務専門員はそれぞれ 1 人，その他 39 人，であった。この 77 人には含まれない，事務員・販売員・工員のカテゴリーに数えられた回答者のなかにも，フロリダのいうクリエイティブクラスに近い人々が相当数いるのではないかと思われる。

なお，喫茶店の利用動向について，神田神保町に通ってくる一般の人々の回答と比較するために，別の性格を持つグループ（神田雑学大学，本と街の案内所来所者）に回答を依頼した。

3　神田神保町の喫茶店とコミュニケーションに関するアンケート調査結果

この調査の目的は，神田神保町の喫茶店の重要性を検証することにある。「活字情報産業従事者の喫茶店利用頻度が高いこと」と，また，図書・出版関係の職業はフロリダの言う創造的職業であり，その定義にしたがえば，神保町が創造的なゾーンであると仮定される。神保町が創造的なゾーンであることと，喫茶店が多いことと関係しているという事実をアンケートの回答の中に見出すことを目的としている。

⑴　調査の方法と回答者の属性

この調査は，平成 19 年から 20 年にかけて，江戸川大学共同研究費により，初年度はヒアリング調査，次年度（平成 20 年度）にアンケート調査を行った。アンケートの調査の概要は以下の通りである。

アンケート実査期間：平成 20 年 10 月～12 月

調査方法：各団体にて，留め置き法あるいは会議に際して一斉に記入していただく等で回答された。

アンケート回答者：調査票への回答を次の表に記載された 4 つの団体にお願いした。

回答協力団体	有　効 回答数	団体の特徴
古書籍商業協同組合神田支部	40	95%が男性，75%が 3-40 歳代，全て古書籍商
神田雑学大学	68	63%が 50 歳代以上，無職の構成比多い
本の街・神保町を元気にする会	64	管理職の構成比多い
本と街の案内所　来所者	83	学生の構成比多い
回答数合計	255	

各団体の特徴を確認するために，職業分類とクロスしてみた。管理的職業の回答者の 50%が「本の街・神保町を元気にする会」の回答者であった。また「事務員・販売員・工員」の回答者の割合も同団体において高かった。「大学教員・専門職」と「学生」の比率が，「本と街の案内所来所者」グループで高かった。自営業と回答した人の 76.3%が「古書籍商業協同組合神田支部」の回答者であり，この調査における「自営業者」とは，ほぼ古書店経営者であると考えてよい。「自由業」「主婦・パート」「無職」の構成比が高いのが「神田雑学大学」で，とりわけ「無職」の 68.4%が神田雑学大学グループの回答者である。

⑵　アンケート調査から得られた主な知見

地元拠点的喫茶店

神保町で働いている人達のほとんどは行きつけの喫茶店があるとみられる（68.2%）。「よく利用する喫茶店がある」と回答した人が具体的な店名を記入した数をみると，度々登場する名前は，「さぼうる」47 件，次いで「ドトールコーヒー」30 件，「カフェテラス古瀬戸」20 件，「ラドリオ」17 件，「カフェ・ティシャニー」16 件，「上島珈琲店」15 件の順で多かった。よく利用する具体的店名を回答者グループ別にみると，「古書籍商業協同組合神田支部」「本の街・神保町を元気に

する会」「神田雑学大学」のすべてで，概ね1位と2位が，「さぼうる」と「ドトール」であった。異なる傾向を示したのが「本と街の案内所来所者」で「ラドリオ」と「ティーハウスタカノ」が1位と2位に挙がった。このような知見から，地元人の拠点ともいえる喫茶店が存在しているのではないかと思われる。

利用目的

回答者全体からみると，喫茶店の利用目的は，「一人でいる」ことに使われることが多い。「休憩」が最も多く，ついで「打ち合わせ」「雑談」「一人で考えごと」「読書」が多い。「雑談」「打ち合わせ」を応接間としての利用とすると，28.3%，「休憩」「時間つぶし」「考えごと」「読書」「パソコン」を一人での利用，書斎・リビングルーム的利用とみなすと，合計59.6%で，「雑談」「打ち合わせ」などの応接・コミュニケーションのための利用より圧倒的に多い。

喫茶店のヘビーユーザー

回答者全体の喫茶店の利用程度は，一か月1〜2回程度の人が最も多い（41.1%）が，週2〜3回の人が31.6%，毎日の人が12.2%いる。

喫茶店の利用頻度で「毎日」と回答した比率の高い職業は，「事務員・販売員・工員」と「自営業」であった。この調査の場合「自営業」者のほとんどが古書店関係者である。「週2〜3回」と回答した比率の高い職業は，「管理的職業」「大学教員・専門職」「自営業」「自由業」であった。これらのグループと反対に，「月1〜2回」の比率の高いあまり使わない回答者は，「学生」「主婦・パート」であった。

回答者のグループ別にみると，「古書籍商業協同組合神田支部組合員」は「毎日」が16.2%，「週2〜3回」が40.5%で，合計55.7%が週2〜3回以上喫茶店に通う，ヘビーユーザーであると言える。「本の街・神保町を元気にする会」も「毎日」と「週2〜3回」のヘビーユーザーが多い（13.4%，41.0%）。「本と街の案内所来所者」は「月1〜2回」が最も多く（51.4%），「神田雑学大学」ではヘビーユーザーが少なく，「半年に1回以下」が比較的多い。

これらの知見から，図書・出版関係の仕事に就く人が，他のグループ（学生・研究者や一般来街者が多く含まれる「本と街の案内所来所者」と「神田雑学大学」）に比べ喫茶店の利用頻度が高いことが明らかになった。

コミュニケーションの手段

回答者全体の傾向として「親しい人との語らい」では，「喫茶店で直接会って」33.8%が最も多いが，「電話で」21.4%，「eメールで」22.4%の間接的対話の比率の合計は43.8%である。直接的対話よりも間接的対話の率が高い。直接の語らいが行われなくなってきているのだろうか。

親しい人との雑談の場所・方法と職業との関係には差異があった（0.000）[6]。「喫茶店で会って」の構成比が高い職業を順にあげると，「自由業」「自営業」「学生・無職（同率）」「管理的職業」「大学教員・専門職」の順に構成比が高い。これらに対して「事務員・販売員・工員」は「電話で」が突出しており，「主婦・パート」は「個人のeメールで」が突出している。

グループ別に雑談の方法をみると，「喫茶店で会って」は古書籍商業協同組合と本と街の案内所来所者に多い。また「飲み屋で」とわざわざ書きこんでくれたのは古書籍商業協同組合員であった。

書く習慣

手紙・日記・原稿など，「書きもの」の習慣について聞いたところ，回答者全体の傾向としては，「よく書く」「時々書く」の割合が高かった（両者合わせて61.7%）。ところが，回答者グループ別にみると，「古書籍商業協同組合神田支部員」の場合，「ほとんど書いたことがない」「あまり書かない」を合わせて69%にのぼった（.003）。ただし，支部員たちは，PCに向かう時間は非常に長く（PCの利用状況の職業別クロス分析による），書名の入力を主な仕事としているのであるから，「個人的なものは書かない」と解釈する必要があるだろう。

その他の自由な対話の場所

楽しみ・趣味で使う施設の有無については，27.1%の人が書き込みを行った。そのおもな施設はカラオケ屋と飲み屋が代表である。交流場所として具体的に記入された店名を集計すると，全体としては，千代田ボランティアセンターが 13 件，カラオケパセラが 11 件，東京古書会館が 8 件，カラオケ館・学士会館・千代田区立図書館がそれぞれ 7 件であった。カラオケ屋 2 件分を合わせると，18 件で 1 位になる。全体として言えることは，書き込み件数が多いのは飲食店であるが，非常に多様で拠点と言えるほどの店はなかった。特定の名前に多数の人の書き込みがあった交流施設の 1 位はカラオケ屋であり，2 位が千代田ボランティアセンターであった。

回答グループ別にみると，カラオケの回答者が多いのは，「本の街・神保町を元気にする会」関係者であった。千代田ボランティアセンターを回答した人は，「神田雑学大学」関係者と「本と街の案内所」関係者に多い。東京古書会館の記入者はそのほとんどが古書籍商業協同組合員であるが，本の街・神保町を元気にする会関係者の回答もみられた。

おわりに

本稿の目的は，神田神保町の喫茶店と活字情報産業で働く人々との関係をアンケート調査によって知ることにあった。調査の結論として，書籍・出版産業従事者の喫茶店利用頻度は，一般の来街者に比べて高いと言える。また，この調査の回答者全体がほとんど神田神保町周辺に通学・勤務している「地元人」であるが（千代田区内 81.9%），そのうち 70%の人が良く行く喫茶店を持っていた。つまり「地元拠点」と言えるような喫茶店が存在することが示唆された。なかでも書籍・出版関係者の溜まり場といえそうな喫茶店についても示唆を得ることができた。これらの知見から，神田神保町には書籍・出版業界関係者の自由な直接対面のコミュニケーション空間としての喫茶店が育ち存続していると結論することができる。拠点的喫茶店は業界コミュニティの存在の証であり，神保町にとって欠くことのできない商業施設である。また，出版関係者の構成員が多い回答者グループのカラオケ屋に対する志向が最も高かったことも興味深い知見である。

最後にこの研究にご協力いただいた団体に感謝申し上げたい。

《注》

（1）『海舟座談』の中で，岩本善治の観察した勝海舟の生活について述べられている。来客時の食事のもてなしがいつも同じ方法で，最後にコーヒーが出てきた。

（2） 2007 年度江戸川大学共同研究費調査（研究代表大内田鶴子，共同研究者土屋薫）。

（3） アメリカの職業分類は，アメリカ合衆国労働統計局 U. S. Department of Labor の社会的職業のリスト List of SOC Occupations 標準職業分類 Standard Occupational Classification による〈http://www.bls.gov/OES/current/oes_stru.htm〉。日本標準職業分類と少し異なるので，国際標準職業分類を参考にして，調査票の選択肢を作成した。

（4） 例えば出版社に関係して働く人々，書店に関係して働く人々，大学・研究機関で働く人々など。脇村義太郎は神田神保町を巨大なブック・コンビナートと表現している（226）。神田神保町の従業者に占める図書・出版・IT 関係の就業者数の割合について正確に知ることはこの研究の重要なポイントであるが，追及しきれなかった。就業構造については別の研究方法による厳密な調査研究で明らかにする必要があるので，また別の課題として取り組みたい。なお，調査結果の詳細は付録を参照されたい。また，紙幅の都合上，集計表は割愛した。

（5）「本の街・神保町を元気にする会」の構成員は，三省堂書店・有斐閣・小学館・信山社・岩波書店・八木書店・集英社・中央経済社・明治大学などである。

（6） カイ二乗検定値 0.000　以後コンマ以下のみ記載。

参考文献

アメリカ合衆国労働統計局の社会的職業のリスト標準職業分類（United States Department of Labor, 125Years Bureau of Labor Statistics, List of SOC Occupations, http://www.bls.gov/OES/current/oes_stru.htm）

巌本善治編，1930 年，『海舟座談』岩波文庫，青 100-1
大内田鶴子，2008 年，「古書と出版の比較文化論 ── 比較出版都市論のための試み　イギリス編 ──」江戸川大学紀要『情報と社会』No. 19
Florida, Richard, 2002, *The Rise of the Creative Class,* Basic Books
日本労働研究機構『国際標準職業分類 ── 1988 年改訂版』1993 年
モンテスキュー=大岩誠訳，1950 年『ペルシア人の手紙（上）』岩波文庫 34-005-6
脇村儀太郎，1979 年，『東西書肆街考』岩波新書（黄版）
渡辺淳，1995 年，『カフェ ── ユニークな文化の場所』丸善ライブラリー

集計結果の詳細

Ⅰ　喫茶店について

Ｑ１　神田神保町でよく利用する喫茶店がありますか？

1　あると回答した人が 174 人 68.2%であった。

よく利用する喫茶店が有ると回答した人を職業分類別に分析してみた。自営業において有りとする人が 84.2%と，最も多かった。この事実は，回答者の多くが古書店経営者であることと関連しているかもしれない。次いで，管理的職業の人が 79.2%と高かった。その次は大学教員・専門職で 72.7%であった。

事務員・販売員・工員では，61.3%が有りと回答している。

これらとは反対に無いという回答に着目すると，主婦・パートは「無い」が 81.8%であった。それに次いで，学生の 43.8%が無いと回答した（.003）。

以上の結果から，神保町で働いている人達のほとんどは行きつけの喫茶店があるとみられる。

「よく利用する喫茶店がある」と回答した人が，具体的な店名を記入した結果を集計したところ，回答者全体で最も多く記入された名前は「さぼうる」47 件，次いで「ドトールコーヒー」30 件，カフェテラス古瀬戸 20 件，ラドリオ 17 件，カフェ・ティシャニー 16 件，上島珈琲店 15 件の順で多かった。

この調査は，職業グループ別交流拠点を明らかにするという狙いを持っていたので，回答者のグループによる傾向の差異をみてみたい。古書籍商業協同組合の回答者でもっとも多かった店は「さぼうる」と「ドトール」が同数で一位であった。神田雑学大学の関係者の回答でもっとも多かったのは「さぼうる」で，2 位の「ミロンガ」を引き離していた。本の街・神田神保町を元気にする会に関係した回答者では，一位「さぼうる」「ドトール」が同数で，二位が「ティシャニー」であった。本の街案内書の来所者を含む関係者では，一位が「ラドリオ」「ティーハウスタカノ」同数で他のグループと異なる傾向が得られた。

Ｑ２　その喫茶店で何をしますか。

喫茶店をよく利用する目的の一位は「休憩」28.3%，二位は「打ち合わせ」17.2%，三位は「雑談」11.1%，四位は「一人で考えごと」「読書」がそれぞれ 10.8%であった。全体として利用目的は多様で，特に目立つ使用目的は無いことがわかった。

一人になることに使用されるのか，人と対話することに使用されるのかどちらの要素が大きいか，解釈を試みると，「雑談」と「打ち合わせ」（応接間がわりの利用）が合計で 28.3%，「休憩」「時間つぶし」を一人での利用と考えると合計 36.9%である。「考えごと」「読書」「パソコン」を書斎代りの利用とすると，合計 22.7%であった。休憩と書斎がわりの利用を合計すると 59.6%で，概ね一人での利用が，人と対話する場所としての利用よりも多いといえる。

Ｑ３　神保町以外のお店も含めて，あなたが良く行く喫茶店を選ぶ主な理由は次のどれですか？

良くいく喫茶店を選択する理由は，一位が「室内の雰囲気」で 21.0%，次いで立地場所が 18.3%，値段・メニューは喫茶店の選択理由としては三番目であった。

よく行く理由の二番目を選択してもらったところ，「室内の雰囲気」が 28.6%，「立地場所」が 24%で一番目の選択理由をさらに裏付けるような結果となった。

Ｑ４　神田神保町で，時々利用する喫茶店がありますか？

省略

Ｑ６　神保町以外のお店も含めて，あなたが喫茶店を利用する頻度に〇をつけてください。

神保町エリア以外の喫茶店も含めて，利用する頻度は，月 1〜2 回の人が 41.1%で最も多く，次いで週 2〜3 回（月にして 10 回前後）が 31.6%，毎日利用する人は，9.5%であった。一か月に 10 回以上利用する人の割合は回答者の 41.4%である。

喫茶店の利用行動では男女による差が見られた。よく利用する店のある人は男性で71.4%，女性で64.9%であった。利用頻度では，男性の場合週2〜3回の人が35.3%，毎日の人が12.2%であるが，女性では週2〜3回の人は26.4%，毎日の人は4.4%でずっと少ない。女性の利用頻度では，月1〜2回の人たちが最も多く，50.5%を占めた。

喫茶店の利用行動を職業別にみると，管理的職業，大学教員・専門職，自営業，自由業はそれぞれ「週2〜3回」の利用頻度への回答者が最も多い。これに対して，「毎日利用」と回答した人の構成比が高い職業は「事務員・販売員・工員」と「自営業」 であった。学生，主婦・パートは，月1〜2回の頻度の人が多い。

団体別に利用頻度をみると，古書商業共同組合員は毎日が16.2%，週2〜3回が40.5%で，これらをヘビーユーザーと表現すると55.7%がヘビーユーザーである。男性の利用者，自営業の利用者が多く回答されていたのは，このグループの影響であると思われる。本の街・神保町を元気にする会も「毎日」と「週2〜3回」利用するヘビーユーザーが多い（13.1%,41.0%）。「月1〜2回」の利用者も41.0%いる。本の街案内所来所者では，「月1〜2回」が最も多く51.4%である。神田雑学大学では，「毎日」と「週2〜3回」の人は他と比べ一番少なく，「半年に1回以下」が比較的多い。

Ⅱ　コミュニケーションのツールについて

Q7　あなたは親しい人と雑談をする時，次のどの方法を良く用いますか？

親しい人と雑談する時のよく用いる方法としては，「喫茶店で会って」が33.8%で最も多く，次いで「個人のｅメールで」が22.2%，三番目が電話で21.4%であった。

同じ質問で，よく用いる方法の第二位をたずねると，一位は電話が25.2%，二位は喫茶店とｅメールが22.4%で同数となった。

これら結果から，親しい人との語らいは「喫茶店で会って」という対面重視，直接重視の人が，若干多いが（アンケート調査の標題からバイアスが罹っているかもしれない），電話とｅメールが同じ程度で使用され，また両者合わせると40%以上になることから，直接の語らいがそれほど行われていないことがわかる。親しい人と雑談するときには，「喫茶店」「ｅメール」「電話」が同じ程度で使用されている。いわゆる「井戸端会議」はどこに行ったのだろうか？　楽しむだけの会話はｅメールと長電話に駆逐されつつあるのだろうか。

雑談の方法と年齢のクロス集計を見ると，喫茶店で会って話す割合の高い年齢層は，23〜29歳と50歳以上であった。これに対して，個人のｅメールで雑談する割合の高い層は40〜49歳の層であった。

喫茶店で雑談する年齢階層は，比較的自分の時間を持てる階層と一致する。あるいは，学生時代に喫茶店に通っていた世代とその子どもの世代であるともいえる。

打ち合わせで喫茶店を活用する年齢階層は19〜22歳で最も高く，ついで40歳代から年齢が上がるにつれて割合が増えている。オフィスや学校を利用する層は23〜29歳が最大で年齢が上がるにつれ構成割合が下がる（カイ2乗：有意水準.031）。電話の利用については年齢階層の差が表れなかった。これらは，オフィシャルな話をする場を持つか持たないか（仕事組織への所属）の差異と，お茶代を支払う余裕の多寡に関係しているのではないか。

親しい人との雑談の場所・方法と職業との関係には差異があった（.000）。「喫茶店で会って」の構成比が高い職業を順にあげると，「自由業」「自営業」「学生・無職（同率）」「管理的職業」「大学教員・専門職」の順に構成比が高い。

これらに対して「事務員・販売員・工員」は「電話で」が突出しており，「主婦・パート」は「個人のｅメールで」が突出している。

団体別に雑談の方法をみると，「喫茶店で会って」は古書籍商業協同組合と本の街案内所来所者に多い。また「飲み屋で」とわざわざ書きこんできてのは古書籍商業協同組合員であった。

Q 8　あなたは仕事などで打ち合わせをする時，次のどの方法を良く使いますか？

仕事などで打ち合わせ時最も多いのは「オフィスや学校の部屋で会って」が 47.6%で，次が「喫茶店で会って」20.1%であった。二番目に良く利用する場所・手段は，電話が 25.7%，喫茶店が 24.5%でほぼ同じ程度に利用された。

これらの結果から言えることは，仕事上のコミュニケーションについては，直接・対面が重視され，その手段として，事務所・喫茶店・電話の順で用いられていることが理解できる。

仕事の打ち合わせでは，男性の方が「喫茶店で会って」の割合が高かった（男性 25.5%，女性 11.4%）。

仕事などの打ち合わせ場所を職業分類別にみた。喫茶店を用いる比率の高い順に挙げると，「無職」「自営業」「自由業・学生（同率）」「管理的職業」であった。

オフィスや学校の部屋を用いる比率の高い順に挙げると，「事務員・販売員・工員」「主婦・パート」「大学教員・専門職」であった。電話を用いる率は主婦が特に高く，メールを用いる率では学生が特に高かった（.002）。

団体別にみると，「喫茶店で会って」仕事の打ち合わせをする比率が高いのは，古書籍商業協同組合と本の街神田神保町を元気にする会であった。「街のオープンスペースで合って」は神田雑学大学がもっとも多かった。「オフィスや学校の部屋」は案内所来所者で最も高かった。

Q 9　あなたは手紙や日記，その他原稿などを書くことがありますか？

この調査の回答者は，手紙・日記・現行などをよく書くが 25.5%いて，時々書く人が 36.2%，両者合わせると 61.7%にのぼる。

手紙・日記・原稿を書く人の割合は，女性の方が若干高かった（男性 57.5%，女性 68.5%）。

団体別にみると興味深い結果が得られた。古書籍商業協同組合では 44.4%が「ほとんど書いたことがない」と回答し，「あまり書かない」と合わせると 69%にのぼる。これに対して，他の 3 団体はすべて「よく書く」と「時々書く」合わせて，65%以上に上っている（.003）。

Q10　あなたは普段どのように携帯電話を利用していますか？

複数回答を足し挙げた結果，電話としての利用が 85.4%で，メールの利用が 75.7%と接近している。

写真が 30.4%，検索が 35.2%で類似した結果になっている。SNS としての利用は 13.8%で，ブログ作成や書き込み（6.1%，4.9%）より少し多い。

Q11　あなたは普段どのようにパソコンを利用していますか？

パソコンの主な利用方法は，仕事で毎日 4 時間以上が 40.2%で最も多かった。この選択肢は，ヘビーユーザーを意味しており，ネット検索や文書作成は当然のこととして含まれている。次いで，「メール・文書作成」が 25.9%，「ネット検索」が 25.9%で同じ割合で会った。

パソコンの利用状況を年齢階層で分析してみると，利用状況の年齢による違いが有意水準（.000）で現れた。パソコンを毎日 4 時間以上使用している回答者は，23〜29 歳の 63.6%，30〜39 歳の 57.1%，40〜49 歳の 53.7%であった。

これに対して大学生が多く含まれる 19〜22 歳の回答者の主な利用状況として，ネット検索をあげた人が 60%にのぼる。他方，60 歳以上の場合，利用は「メール・文書作成」が主であるとする回答が 55.1%で最も多かった。

パソコンの利用状況を職業分類別にみると差異があった（.000）。全体の度数分布より特に高いところでは，「毎日 4 時間以上」の回答者が，「大学教員・専門職（65.6%）」と「自営業（52.6%）」で高かった。「ネット検索」では，学生と主婦・パートが高かった。「メール・文書作成」では無職と管理的職業，主婦・パートが高かった。

回答者数が 75 人で少なく，あまり確実ではないが，参考までにパソコンの利用状況を，職業細分類で見ておこう。「仕事で 4 時間以上」と回答

している人は，情報処理技術者 100%，文芸家・著述家 100%，社会福祉事業専門員 100%，図書館司書 100%，デザイナー 87.5%であった。記者・編集者は「仕事で 4 時間以上」は 55.6%，「メール・文書作成」が 44.4%であった。これらと異なる傾向を示したのは，経営コンサルタントで，メールとネット検索の割合が高かった。研究者・大学教員もネット検索の割合が高かった。

Q12　あなたは普段どのようにインターネットを利用していますか？

インターネットの利用状況については，常連ホームページがある人が 48.6%，次いで SNS に登録している人が 13%，自分でブログやホームページを作成している人が 12.5%であった。「2 チャンネル」に常連スレッドありは 1.4%であった。

Ⅲ　喫茶店以外のコミュニケーションの場所について

Q13　楽しみ，趣味，交流，懇親会，学習などで，神田神保町界隈でよく利用する施設を教えてください。

楽しみ・趣味で使う施設の有無については，27.1%の人が書き込みを行った。そのおもな施設はカラオケと飲み屋が代表である。前項の質問で親しい人と雑談をする場所として，喫茶店をあげず，飲み屋と記入してきた人もいた。

交流場所として具体的に記入された店名を集計すると，全体としては，千代田ボランティアセンターが 13 件，カラオケパセラが 11 件，東京古書会館が 8 件，カラオケ館・学士会館・千代田区立図書館がそれぞれ 7 件であった。カラオケ屋 2 件分を合わせると，18 件である。これらから，飲食店も含めた交流施設の一位はカラオケ屋であり，二位が千代田ボランティアセンターであるといえよう。

回答グループ別にみると，カラオケの回答者が多いのは，本の街・神田神保町を元気にする会関係者であった。千代田ボランティアセンターの回答は，神田雑学大学関係者と本の街案内書関係者に多い。東京古書会館の記入者はそのほとんどが古書籍商業協同組合員であるが，本の街・神田神保町を元気にする会関係者の回答もみられた。

Ⅳ　職業などについて

回答者の属性については

問Ａ　あなたの性別を教えてください。

男性が 61.1% ，女性が 38.9%であった。

問Ｂ　あなたの年齢を教えてください。

年齢は回答者の 43.4%が 39 歳以下，56.6%が 40 歳以上で年配者が若干多い。10 歳階級別では，30 歳代（29.1%）と 60 歳以上（21.5%）の人が多い。

問Ｃ　あなたのお住まいの地域を教えてください。

居住地は東京都内の人が 67.5%であり，23 区内に居住している人が 50.2%であった。

問Ｄ　あなたの勤務地・通学地・定期的に通っている場所を教えてください。

回答者の 81.9%が千代田区内に定期的に通っている。お茶の水・九段・神保町エリアに通っている人は 68.8%であった。

問Ｅ　あなたの職業を教えてください。

1. 管理的職業（高級公務員・議員・会社役員など）24 人　9.8%
2. 教員・専門職　33 人　13.4%
3. 事務員・販売員・工員　62 人　25.2%
4. 自営業　38 人　15.4%
5. 自由業　9 人　3.7%
6. 学生　16 人　6.5%
7. 主婦・パート　11 人　4.3%
8. 無職　19 人　7.7%
9. その他　34 人　13.3%

問Ｆ　問Ｅで，2. 教員・専門職　4. 営業　5. 自由業と回答した人は次の分類の中から一つ選んで○をつけてください。選択肢があてはまらない人は，19. その他（　　）に具体的に記入してください。77 人

1. 研究者・大学教師（4）
2. 技術者（機械・電気・化学・建築・土木・農林・海洋・その他）（0）
3. 情報処理技術者（5）

4. 教員（幼稚園・小学校・中学校・高等学校・その他）（1）
5. 文芸家・著述家（1）
6. 記者・編集者（10）
7. 彫刻家・画家・工芸美術家（0）
8. デザイナー（8）
9. 写真家・カメラマン（0）
10. 音楽家（0）
11. 俳優・舞踏家・演芸家（0）
12. 職業スポーツ家（0）
13. 社会福祉事業専門員（1）
14. 個人教師（0）
15. 鑑定士（0）
16. 経営コンサルタント（4）
17. アナウンサー（0）
18. 図書館司書（3）
19. その他（39）